

肉親への手紙等に見る人間栗林忠道

高 木 寛

はじめに

国を出てから 幾月ぞ
ともに死ぬ気で この馬と
攻めて進んだ 山や河
とった手綱に 血が通う
昨日陥した トーチカで
今日は仮寝の たかいびき
馬よぐつすり 眠れたか
明日の戦は 手強いぞ

これは、戦争中「露宮の歌」や「曉に祈る」などと共に、多くの人々に広く愛唱された軍歌「愛馬進軍歌」の一節である。戦場で兵士が、共に戦う愛馬に思いを寄せ、やさしくいたわる気持ちを歌ったものだが、軽快で勇壮ななかにも、何となく哀調をおびた歌であり曲である。

馬は戦争中欠かせない生きて兵器として、軍人を乗せる乗馬や荷を積む駄馬、車を引かせる轡馬として尊重され、戦力の一翼をになったのである。

この歌詞は、日中戦争が始まった翌昭和十三年（一九三八）秋にひろく国民から公募し、陸軍省選定として一世を風靡したものだが、この歌の選者をつとめたのが当時陸軍省軍務局馬政課長で、後に硫黄島で玉碎する松代西条出身の栗林忠道である。

東京都内昭島市に義井未亡人（九十五歳）と住む長男太郎氏は、この歌詞について、「とった手綱に血がかようというところは、父が添削加筆した部分です。いかにも文人肌と言われた父らしい表現です」と語っている。

最近松代大本営跡については、世間の注目をあび、多くの人々によってその詳細が報告され、かなりの数の本が書かれているが、栗林大将については、『硫黄島戦記』



写真1 栗林忠道大将の生家（松代町西条穴）

母もとは頭
 脳明晰、いわ
 ゆる良妻賢母
 で、夫が事業
 のため留守が
 ちな家庭を守
 り、使用人を
 使って共に農
 業を営んでい
 た。子供達に
 対しては厳格
 ななかにも慈
 愛をもって育
 てた。忠道は
 晩年母につい

て、「母の厳格な躰が今日の自分をあらためたものであつて、子供の育つのは母の影響が大である。私も性格的に母の感化が大きかった」とよく妻子に語り聞かせていたという。

忠道が軍人の道に進み、騎兵科の選択をしたのは多分に兄芳馬の感化があつたことが見逃せない。学業成績が優秀であつた芳馬に、受持教師は進学を勧めたが、母も



図1 栗林忠道大将の生家松代町穴のあたり
 奇しくもノロシ山をへだててすぐ東側に松代大本営跡がある。

を除いてはあまり多く語られていない。

先日たまたま市誌編さん室の資料収集のため松代を訪れた際、栗林大将の生家を訪れ、現在生家を継ぐ栗林直高氏（須坂市旭ヶ丘小学校長）から種々話を聞く機会を得ることができた。そこで伺った話や、生家に残っている

手紙、資料等を基にして、一人の人間として常に家族や部下を思いやり、薩黄島で圧倒的に優勢な火力を持つ数倍の米軍を相手に、最後まで勇戦敢闘し、敗れたりとはいへ、米軍をして終始震駭せしめ、日本陸軍伝統の名を辱しめなかつた、我が郷土出身の栗林忠道將軍の人間像の一端を紹介してみたい。

一 エリート將軍を目ざして

栗林忠道は、明治二十四年（一八九一）七月七日、市内松代町西条穴区三〇七八番地に、栗林鶴治郎ともとの間に、長男芳馬に次ぐ次男として誕生した。

穴区は貞道長野（真田線（地蔵峠道））の沿線で、北信濃から地蔵峠を経て、東信や上州へ通ずる交通路の入口に当たり、豊栄小学校とは貞道をへだてた西側にあり、奇しくも松代大本営地下壕裏さい跡とはノロシ山をへだてたすぐ東側にあたる。

家は戦国時代より真田家閨屋郷の郷士（のち士族）として現在の地に居住した旧家である。鶴治郎は、郷士当時の先祖伝来の資産をもとに、銀行や製糸業に重役として出資したが、いわゆる士族の商法で間もなく失敗、破産のうき目にあつてしまふ。従つて忠道の少年時代は、ぜい沢や我がままの余裕は無かつた。

との意向と本人の考えで進学を断念、農業に専念することとなつた。その後、日露戦争に従軍、騎兵曹長として出征、筆まめで写真好きの彼は、さつそつとした馬上姿をしばしば郷里の父母、弟妹達に送つてきていたのである。

忠道は明治二十九年松代小学校を終えると、西長野上野ヶ丘の長野中学校（現長野高校）に入学した。後に同じく長野中学校から陸軍士官学校に進み、砲兵中尉に任官、陸軍大学校入学準備中大正十一年惜しくも病没（肺結核）した弟の熊尾や友人と、学校近くの西長野に下宿して自炊生活をしながら通学した。

将来を期待され、仲睦まじかつた弟熊尾は、秀才型で特に理教科に優れ剣道の達人でもあつた。最愛の弟を亡くした忠道の落胆悲しみは深く、生涯弟の死を惜しみ通してつた。

長中同期（第十一回卒）には、金子繁治海軍中將、一学年上に篠原直衝陸軍少將、神林美治海軍中將、そして四学年下に日中和平に尽力した朝陽出身の今井武夫陸軍少將がいる。この頃から豊かな文才を発揮した忠道は、長野中学校の『校友会誌』（明治四十四年）に、「自炊生活」と題して友人達との気軽な自炊生活の様子を詳細に紹介してつて興味深い。勉強のあい間に、尺八の練習を

したのもこの頃で、近所の栗林熊平老人から尺八の手ほどきを受け、卒業までには相当の腕前に上達している。

忠道の長中時代の第二志望は、外国回りの報道記者であったという。英語が得意で（後に米国留学時に役立つことになる）、当時の井上英語塾へ進学を希望したが、経済的理由もあって兄芳馬に反対され、受験を断念、東亜同文書院と陸軍士官学校を受験、共に合格したが、長中の教頭と相談した結果、陸士入学に踏み切ったという。

戦前の日本では、農家で優秀な二、三男に開かれた出世コースは、陸士、海兵に進んで将校の道を歩むか、師範学校に入り教師、校長となって教育者の道を選ぶかが相場とされていた。いずれも官費で教育を受けられ、将来を約束されるからであったが、師範のコースは、小学校高等科から進めたが、陸士に入るには、中学校を経由せねばならなかった。したがって、結果的には、将校への道は、かなり裕福な自作農ないし中小地主以上の子弟でないとかなえられなかったのである。

こうして忠道は、大正元年（一九一二）将校養成機関である東京市ヶ谷の陸軍士官学校に入学（二十六期）、陸軍将校へのスタートを切った。

軍人は全くの序列本位の社会で、その序列は陸士の卒業成績によって決まった。同期生の中でトップグループ

忠道が將軍の登竜門である陸軍大学校に入学したのは、大正九年十二月、騎兵中尉二十九歳の時であった。随分勉強したようで頑健な体力にまかせて一日三時間位しか眠らなかったという。一度で難関を突破できたのは、本人の努力は勿論であるが、一番で卒業、エリート將軍のシンボルである恩賜の軍刀を拝受しているのをみても多分に天分があったからであると思われる。陸大在学中は



写真3 栗林忠道大將が拝受したエリートの將軍のシンボルであった恩賜の軍刀

殊に戦略戦術学に抜群であったと後年家人に語り続けていたという。陸大夏季、冬季の定例休暇には決まって生家に帰省し、両親に元氣な顔を見せて安心させた。夏の日



写真2 第三十一軍司令官陸軍大將栗林忠道

でスタートを切れれば、よほどの大過がない限り、將軍の座まで順送り進むことができた。

陸士を出た士官候補生は、歩兵、騎兵、砲兵、工兵、航空兵などの各兵科に分かれたが、栗林は兄の影響もあって騎兵科に進んだ。この進路については生涯悔いていたようで、常に家人には、「一軍人になる場合は本流の歩兵を選ぶべき」と口癖に言っていたという。将来騎兵のあるべき姿としてその機械化をどのように考えていたのか、また軍の近代化にとって乗馬騎兵の価値をどのように受けとめていたのだろうか。

中には甥や犬をつれて関屋川に出かけて水泳、夜は部屋に籠り日頃愛用の尺八で追分けを好んで吹いていた。また上京する途中には、温泉が好きでいつも定宿の山の湯の温泉宿で二、三泊し、ここでも宿の亭主等に得意の尺八を吹いて聞かせていたという。

大正十二年関東大震災直後の十一月陸大を卒業すると、三十二歳で兄芳馬の薦めで、同郷更級郡稲里村の旧家同姓の栗林家の義井（十九歳）と結婚、十三年十二月から東京の教育總監部付で昭和三年三月米国に出発するまで新婚生活を送っている。

一 アメリカ留学中の栗林忠道

当時陸大卒の成績優秀者は、陸軍省・参謀本部・教育總監等の中枢機関で幕僚勤務を見習ったあと、アメリカ・イギリス・ロシア・ドイツ等の先進国に、二、三年軍務局所管の駐在員として留学の特権を与えられていた。

忠道も、騎兵第一五連隊中隊長、教育總監部付を経て、昭和三年三月第一回の渡米を命ぜられ、愛用の尺八を持参して单身勇躍して横浜を出帆、大洋丸でハワイ経由サンフランシスコ着でボストンに赴いた。米国騎兵第一師団付で軍事研究のかたわらハーバード大学・オックスフォード大学・ミシガン大学の聴講生として語学と米国史、民

情等を学んだ。

この留学中に、栗林大尉は、日本に残した幼い長男太郎（当時五歳から小学生）宛に数々の絵手紙を送り届けた。これを見ると、栗林大尉のアメリカ留学中の生活の詳細がわかり極めて興味深い。なかでもアメリカの子供達が三輪車を乗り回して遊んでいるところをスケッチ風に画いた絵手紙では、次のように書いている。「お父さんはこうしてアメリカの子供達が遊んでいるところに出会うと必ず立止ってじっとしばらくそれを眺めています。太郎君もこうして元気よく遊んでいるかと思うと……」。

また見本図から切り取った自動車を紹介して、「お父さんは今最新式の四人乗りの自動車を運転しているよ。坊（太郎）がいればいくらでも乗せてやるのになあ。どうだ乗りたいか」などとも書いている。ここには長男太郎への子と思う一人の父親としての情感が込められていて、栗林大尉の人柄が偲ばれる。

このように、アメリカでの大尉は、着任後早速フォードの新車を購入するや、米軍の将校に運転を習って自分で運転し、アメリカ大陸の各地をドライブして回って見聞を広めている。後に硫黄島でも、堀江芳孝参謀に向かい、「若い頃アメリカにいて、自動車を買ってあちこち見て回ったが、アメリカの軍事と工業の繁栄はすばらし

い。デトロイトの自動車工場をみたが、ボタン一つ押すだけで全工程が動く。その実業家が陸軍や海軍の長官になって軍需工場で軍の真づけをやるんだからこっちはたまらない」と、日米国力の差を嘆いている。

三年の留学を終え、いったん帰国したが、翌昭和六年（一九三一）にはカナダ公使館付武官として再度のアメリカ大陸に在任。この二度にわたった約六ヶ年間にわたる海外生活により国力や民情を直接直視、これにより多くの外国人の知己をえ、海外事情にも非常に明るい陸軍有数のアメリカ通であった。そのため、第二次世界大戦の日本の置かれた立場、行動に慎重を期しかつ軽拳を戒めていたのは、同じく海軍でアメリカの国情にくわしく、アメリカ通として太平洋戦争開戦に慎重な態度だったといわれる長岡市出身の山本五十六大将と共通したところがあるのではないかと。奇しくも共に大戦中第一線で壮烈なる戦死をとげている。

このように日本の軍部は、日露戦争後最大の仮想敵国と目されたアメリカに、山本五十六をはじめとして最優秀の青年士官を数多く送りこんで軍事研究等に従事させた。

栗林もその一人で、アメリカの国情をよく理解し、親近感をもっていた軍人であった。しかし、皮肉にも後に

硫黄島においてその米軍相手に死闘を演ずる運命になるうとは思ってもみなかったにちがいない。

忠道は生涯を通じて母思いであった。在京中は母をよび寄せて同居し、アメリカ留学中に出す通信の中には、母の安否を気づかう言葉が必ずあったという。忠道渡米の際にはその都度母と別れを惜しみ、また母も忠道帰省の通知を受けると忠道大好物の数の子を必ず用意して指折り教えてその帰りを待ったという。

三 栗林忠道の妻子への手紙

硫黄島で陣頭指揮をとる栗林中将は、当時義井夫人の生家の更級郡穰里村（長野市穰里町）で農業を営む栗林知美さん宅に隣開して、国民学校初等科四年に通う二女たか子さん（当時十二歳）にとっても誰よりもやさしい一人の父親で、毎月一、二回必ず陣中便りを送ってたか子さんを励ましていた。次はそのなかの一通である。

「たか子ちゃん元気ですか。お父さんも兵隊さんも皆元気で戦っています。敵の空襲も烈しくなり、軍艦も時々攻めよせることもあります。しかし完全な防空壕がありますから安心です。（中略）田舎は寒くなったことでしょう。お父さんの所は、まだ暑く、蚊や蟬がブンブンしています。この間、東京の

お母さんからたか子ちゃんが、全優だとの便りがありました。お父さんも大変嬉しく思います。これからもよく勉強していつでも全優になるようになさいね。それから全優になっても高慢したり油断してはいけません。又身体を丈夫にすることと誰にでも好かれるようにならなくてははいけません。勉強ができるばかりでなく誰にでも親切にいじ悪や皮肉をしないことです。（下略）」

子と思う一人の父親として、我が愛娘に寄せて人間の生きる道を諭すやさしい温情溢れる便りで、読む者の心をひしひしと打つものがある。

また義井夫人宛てにも、「戦地にて良人より」として、昭和十九年七月から九月にかけて空襲の間を縫って往来する連絡機に託され、次のような手紙を書き送っている。

島の将兵〇〇は皆覚悟をきめ、浮ついた笑一つありません。悲憤決死其のものです。私も勿論さうですが、矢張り人間の弱点か、あきらめ切れない点もあります。（中略）殊に又、妻の御前にはまだ余りよい目をさせず、苦勞許りさせ、これから先きと云ふ処で此の運命になったので、返すがえす残念に思ひます。